

当院における分割胚の融解時期による臨床妊娠率への影響

当院で実施している胚移植に用いる移植胚には、採卵後 3 日目の分割胚と、5 日目まで培養した胚盤胞の 2 種類があります。また、胚移植方法には採卵周期に胚移植を行う新鮮胚移植と受精卵（胚）を一旦凍結し、別の周期に移植する凍結融解胚移植の 2 種類があります。また、受精卵（胚）はその成長度合いによってグレード分けされ、当院の基準を満たした受精卵（胚）だけを胚移植の対象としています。さらに、基準を満たした受精卵（胚）ではあるものの、その成長速度が比較的遅い受精卵（胚）については、凍結融解胚移植を行う際に、胚移植の前日に融解し、1 日培養することで受精卵（胚）の成長を促し、胚移植を行っていただきます（詳しくは当院ホームページの「治療・検査」項目の「体外受精・顕微授精」をご覧ください）。

今回の検討では、採卵後 3 日目の分割胚を凍結融解胚移植したときの妊娠率について、移植前日に融解した受精卵（胚）と移植当日に融解した受精卵（胚）とを比較しました。その結果、移植当日に融解した受精卵（胚）の方が妊娠率が高いことが分かりました。一方、移植前日に融解した受精卵（胚）であっても、移植当日までに成長が進んだ受精卵（胚）は妊娠に至る傾向があることも分かりました。

現在、当院の移植・凍結可能な分割胚の基準は“グレード 3 以上、6 分割以上”です。基準に満たなかった受精卵（胚）についてはすぐに廃棄にはせず、しばらく培養を継続して凍結可能な胚盤胞に成長した場合、凍結して移植胚として用いる事が出来ます。患者様からお預かりした大切な受精卵（胚）ですので、1 つも無駄にすることなく、妊娠に至る可能性があるものは最大限利用するように努めています。

また、当院では受精卵（胚）のスペシャリストである胚培養士に相談できる培養士外来を行っています。凍結した受精卵（胚）や移植した受精卵（胚）について、分からない事や疑問に思った事があれば、ぜひ培養士外来をご利用ください！これからも私達、胚培養士は患者様の治療のサポートを精一杯させていただきます。